

## 2011 年度短期派遣 EUROPA 派遣報告書

氏名： 金子奈美(博士後期課程)

研究テーマ： バスク語作家ベルナルド・アチャーガの作品における自己翻訳

派遣先： バスク大学他(スペイン)

派遣期間： 2012 年 3 月 4 日～4 月 3 日(1 か月間)

### 1. 研究の主旨と派遣の目的

筆者は 2011 年 4 月に博士後期課程に進学し、バスク語作家ベルナルド・アチャーガ(Bernardo Atxaga, 1951-)を対象とした博士論文の準備を進めている。アチャーガはバスク語を執筆言語とするスペインの作家で、作品の多くを自らスペイン語に翻訳している。本研究では、バスク語とスペイン語のテキストとコンテキストを比較・分析することを通じて、非バスク語ネイティブにとってはきわめて困難なバスク語テキストへのアプローチを試みるとともに、バスク語という少数言語の作家が置かれている複雑な文化状況を掘り下げ、アチャーガ文学の理解を深めることを目指している。

今回の派遣では、今後の論文執筆を見据えて二つの目的があった。一つ目は**文献調査**で、とくにアチャーガがバスク語で創作活動を始めた 1970 年代初頭から、初期の代表作『オババコアック』(Obabakoak, 1988)の成功によってスペイン国内外においても作家としての地位を固めた 1990 年代半ば頃までの状況を、バスクとスペイン双方の資料から再構成することに重点を置いた。二つ目の目的は、**現地のバスク文学研究者たちと交流**をもつことである。日本では筆者のほかにバスク文学を研究する人がいないため、今後博士論文を執筆するにあたって、専門的な助言を仰ぐことのできる関係を現地の研究者との間で確立しておくことはきわめて重要となる。なお、派遣前に何人かの先生と連絡を取り合った時点で、**バスク大学との共同学位申請**の話が持ち上がったため、受け入れ先となる文学部の環境や共同学位申請の条件を確認したうえで、現地指導教員の候補となる先生に直接お会いして筆者の研究への理解を得ることも滞在中の重要な課題だった。

### 2. 活動の概要と成果

短期間ながら活動内容が多岐にわたったため、以下では項目別にその概要と成果を記述する。

#### 2.1. 文献調査

派遣の第一の目的である文献調査は、以下の場所で行なった。

- ・ ビルバオ (ビスカヤ地方図書館、ビデバリエタ中央図書館)
- ・ マドリード (スペイン国立図書館本館、アルカラ分館)
- ・ サンセバスティアン (コルド・ミチエレナ図書館)
- ・ その他 (各地の古書店など)

最初に滞在したビルバオでは、現地受入教員をお願いしていたヨン・コルタサル先生が、到着後すぐに図書館や書店を案内してくれ、とくにビスカヤ地方図書館では先生の紹介ですぐに研究者用入館証を発行してもらうことができたので、非常にスムーズな滑り出しとなった。ビルバオでの文献調査はここを拠点に行ない、1970～90年代半ば頃のバスク語雑誌に目を通して、当時の言論や出版状況を確認した。他の図書館ではほとんど見つからない希少な資料(アチャーガの処女詩集の初版など)もここで閲覧することができた。

その後マドリードに移り、国立図書館での文献調査は、おもに市内中心部レコレトにある本館で行なった。当初の予定では分館のあるアルカラに中数日滞在して調査するはずだったが、一度足を運んでみたところ分館はかなり不便なところにあり、設備もあまりよいとは言えなかった。また後述するように、ちょうど同時期、マドリード市内でバスクの言語・文学関連のイベントが連日開催され、そちらにも行く必要が生じたため、アルカラ滞在は中止し、必要な資料のみを事前申請して本館で閲覧するという方法に切り替えた(結果的にはその方が効率よく作業を進めることができた)。そうして、ここではとくにスペインの主要な文芸誌のバックナンバー、国内外で出版された重要な研究書に目を通した。その結果、スペイン国内の文芸誌では1990年代半ば、バスク文学を含む地方語文学の特集が相次いだことが確認できた。

サンセバステイアンでは、以前留学していた時にも頻繁に利用したコルド・ミチェレナ図書館で資料集めに励んだ。この図書館は蔵書数が豊富なおうえに開架式という利点もあって、関心のあるテーマの文献に広くあたることができた。貴重な資料はもちろん請求が必要だが、ここではアチャーガが1970年代に中心となって発行した文芸誌や、彼の初期テキストが掲載された雑誌・新聞、アンソロジーを閲覧して、初期のアチャーガの創作活動の具体的な内容や、彼が活動していたグループ、関連人物などを確認することができ、当時の雰囲気把握するのにおおいに役立った。

図書館では大量のコピーを取ったが、どうしても手元に置いておきたいものに関しては別途購入した。今回調査対象とした時期の雑誌・書籍は入手困難なものが多かったのだが、偶然にも恵まれて、アチャーガの処女詩集の第二版(1983年)、1970年代末～80年代初頭のバスク人作家(スペイン語・バスク語両方における)のアンソロジーなど、貴重な資料をいくつも古書店で見つけることができた。

## 2.2. 現地の研究者との交流

滞在中に面会したのは以下の方々である(いずれもバスク大学)。

- ・ ヨン・コルタサル (教育学部教授、バスク文学)
- ・ マリ・ホセ・オラシレギ (文学部教授、エチェパレ・インスティトゥート副代表、バスク文学)
- ・ エリ・マンテロラ (文学部講師、翻訳研究)
- ・ イボン・ウリバリ (文学部教授、翻訳研究)
- ・ マイテナ・エチェバリア (文学部バスク研究科長)

バスク大学はバスク自治州内の主要な三都市にそれぞれキャンパスをもち、文学部は州都ビトリアに所在する。今回の派遣にあたって受け入れをお願いしていた**ヨン・コルタサル先生**は、バスク文学について論じるうえで彼の著作に言及しないことはあり得ないというほど、過去数十年のバスク文学研究の進展に貢献されてきた人物だが、昨年より所属が教育学部が変わったため、現在は教育学部のあるビルバオ郊外のキャンパスに研究室があり、ビトリアでは週に一度のみ大学院の授業を開講している。そのため、コルタサル先生とはビルバオとビトリアの両方でお会いすることになった。一方、アチャーガ研究の第一人者である**マリ・ホセ・オラシレギ先生**は、文学部で大学院生の指導を担当されているが、現在は2009年に設立された「エチェパレ・インスティトゥート」という、バスクの言語・文化の普及を目的とする公的機関の副代表を務めていらっしゃる関係で、同機関の本部があるサンセバスティアンでお会いした(マドリッドで行なわれたイベントの席でも顔を合わせた)。ただし、バスクの主要な三都市はそれぞれ車で一時間程度の距離にあるため、一日にキャンパス間を移動することは充分可能で、その点とくに支障はなかった。

コルタサル先生には滞在中特別にお世話になった。文学とゆかりの深いビルバオの街やその近郊を案内してくださった他、ご自身の著書を何冊も譲って下さり、筆者の論文草稿に目を通してもらった際には、投稿先の候補となる現地の雑誌をいくつか紹介して頂くことができた。オラシレギ先生には、筆者がちょうどマドリッドに滞在する期間にバスク文学関連のイベントが行われることを知らせて頂き、後述のように非常に貴重な体験をすることができた。また、バスク内外の研究に関する豊富な知識や、ご自身が博士論文を書いた当時の経験(それがアチャーガに関する初めての博士論文となった)にもとづいて、博士論文の執筆プロセスにたいする有益なアドバイスを頂いた。

マドリッドからバスクへ戻る際に数日間滞在したビトリアでは、文学部を視察するとともに、何人かの研究者にお会いした。最初に会ったのは、今年2月にアチャーガと翻訳に関する博士論文の審査を終えたばかりの**エリ・マンテロラ**である。彼女とは研究対象とテーマが同じということもあって、出発前から頻りに連絡を取り合っていたのだが、今回は彼女の博士論文について詳しい説明を受けたのち、使用したデータや資料のコピーを提供してもらった。筆者の行なっているのが文学的なテキスト分析であるのにたいし、マンテロラのアプローチは純粋に翻訳学的なもので、おもにデータを扱っているという違いはあるのだが、彼女が手がけた包括的なデータ収集とその解析結果は、テキスト分析に際してヒントとなるだけでなく、読解に科学的な根拠を与えてくれることが期待されるので、非常に大きな収穫となった。

その後、エリ・マンテロラの指導教授であった翻訳研究科の**イボン・ウリバリ先生**とも話す機会をもった。筆者の研究計画を説明したところ、バスク文学を翻訳という観点から研究する利点を力説され、参照すべき文献のアドバイスも頂いた(ちなみに彼は芭蕉、川端康成、村上春樹といった日本の文学作品をバスク語に翻訳している)。それから幸いにも、共同学位を申請した場合には博士論文の提出先となるはずの**文学部のバスク研究科長**にお会いすることもできた。筆者がアチャーガ

の研究をしていること、博士論文の執筆にあたってバスク大学の教授陣に協力を仰ぎたい旨を伝えると大変喜ばれ、共同学位申請のための条件や具体的な手続きについて丁寧にご説明頂いた。また、現地指導教官の選定に関しても具体的な助言を受けた。

### 2.3. その他の活動

#### ・ マドリードで開催されたバスク語・文学関連イベント(“Euskarari gorazarre /El euskera, una lengua con futuro”)への参加

3月13～16日にかけて、前述のエチェパレ・インスティトゥートの主催で、バスク語とバスク文学に関連したさまざまなイベントが行なわれた。筆者は、バスクの女性作家四人によるシンポジウム(14日)、アチャーガの詩と散文の朗読会(15日)の他、最終日にはバスクを代表する俳優、ダンサー、ミュージシャン、作家や詩人が出演するパフォーマンスを観た。いずれも見応えがあったが、とりわけ研究対象としている作家の肉声で朗読を聞くのは素晴らしい体験だった。この催しのことは現地到着後に知り、当初の予定には入っていなかったのだが、参加できたのは本当に幸運だった。イベントは基本的にスペイン語、ときにはバスク語とスペイン語の両方で行なわれ、バスク語での創作と翻訳、言語を横断したコミュニケーションの問題について改めて考えさせられた。

#### ・ 作家キルメン・ウリベとの交流

キルメン・ウリベ(Kirmen Uribe, 1970-)は、現在アチャーガに次いで国際的に活躍しているバスク語作家で、筆者は現在彼の小説 *Bilbao-New York-Bilbao* の邦訳を手がけている(今年10月に白水社より刊行され、その翌月には作者自身が来日する予定)。ビルバオ滞在中に初めて彼と会い、邦訳と来日に関する打ち合わせをした。実は、彼はコルタサル先生の元教え子で、アチャーガに関する研究をしていたこともあるため、面会時はコルタサル先生を交えて、筆者が現在準備している論文の一部に目を通してもらい、意見を聞いた。3月7日にはビルバオ市内の大きなコンサートホールで、地元のオーケストラの演奏とともに彼が小説の一部を朗読するという催しがあり、そちらにも足を運んだ。

#### ・ エチェパレ・インスティトゥート訪問

既に何度か言及したこの機関は、2010年からバスクの言語と文化を世界に広める活動を行っている。その活動の多くにはアチャーガも関わっているため、副代表を務めるオラシレギ先生から詳細を伺い、関連する出版物を譲って頂いた。また、キルメン・ウリベ来日に際しては助成を得られることになった。

#### ・ 現地メディアへの露出

ビルバオ滞在中、コルタサル先生が手配した新聞社のインタビューを受けた。質問の内容は、筆者のバスクとの縁から始まって、現在取り組んでいるアチャーガ研究、キルメン・ウリベの小説の翻訳、東日本大震災以降の日本社会など。3月24日付の地元紙 *El Correo* の文化欄にて、全文バスク語で掲載された。

### 3. おわりに—今後の課題

以上を見てわかる通り、短期間で数多くの予定をこなした、非常に密度の濃い 1 か月だった。こうして限られた時間の中で目標の達成に邁進できたのも、短期派遣プログラムの支援があったおかげである。なので、滞在中にこれだけ沢山の人のとの出会いがあり、文献調査においても予想以上の成果があったことを報告でき、筆者としても大変嬉しく思う。このような貴重な機会を頂いたことにたいし、関係者の方々に改めて感謝申し上げたい。

帰国後に取り組むべき課題は以下の通りである。

- ・ **収集した資料の整理・読み込み**

今回の文献調査によって、新たに多くの一次・二次資料を入手することができ、これまでの作品読解では把握しきれなかった複雑な文化的・社会的背景の分析が可能になった。当面は収集した資料の読み込みに専念し、作品分析に役立ててゆくつもりである。

- ・ **博士論文計画のさらなる具体化**

上記を踏まえて、博士論文の枠組み・内容ともにさらなる具体化をはかっていきたい。

- ・ **現在準備中の論文の刊行**

昨年度に行なった口頭発表をもとにした論文を、今年中に刊行したいと考えている。投稿先としては、学内の紀要と、現地で紹介してもらったいくつかの媒体が候補となる。

- ・ **バスク大学との共同学位の申請手続き**

バスク大学の先生方と実際に話した印象と、さまざまな方面から頂いた助言をもとに総合的に判断して、マリ・ホセ・オラシレギ先生に現地指導教員をお願いし、共同学位申請の手続きを進めていくつもりである。具体的な手続きとしては、まず大学間で共同学位のための特別協定を結び、共同指導体制が確立された時点でバスク大学に博士論文計画を登録する。執筆期間はそれから 3 年以内(ただし最長 2 年までの延長が認められる)で、どちらの大学にも 9 か月以上の滞在が義務づけられる。滞在は複数回に分けて行なってもよいため、仮に来年 9 月からバスク大学に滞在するとした場合、2014 年 3 月までの 7 か月間を ITP-EUROPA プログラムでカバーすることも可能であると思われる。

- ・ **キルメン・ウリベの小説の邦訳出版と、作者来日に向けた準備**

邦訳の刊行後、作者が来日した際には、学内で何らかのイベントを行なう方向で調整中である。なお、ウリベの小説の翻訳は筆者の研究テーマと密接に関わっており、作者来日もまた、バスク大学との共同学位の件とともに、日本-バスク間の文化交流を深めていくよい機会となることが期待される。

以上